



『和同開珎 (わどうかいちん、わどうかいほう) 』

衣川 寛介

寛永通宝が磁石につくことを見つけた2010年以降、銅銭の作り方や材質に興味を持ち調べました。我が国で発行された銭貨は和同開珎 708年(和銅元年)に始まる皇朝十二銭と呼ばれるものです。それ以前に発行された富本銭が1999年に奈良県明日香村から大量に発見され最古の貨幣と大きく報道されましたが、これは広い範囲には流通しなかったと考えられ、和同開珎が日本最古の銭貨であるとされています。

皇朝十二銭の分析等の資料が、日本銀行の研究資料の中にあることが判り内容を調査しました。銅の製錬技術が確立していない時代の銭貨なので、成分は大きくばらついています。古和同、新和同と分類されているものの中に鉄分が5%程度含まれているものを発見、出来れば磁石でつくかどうか確かめたいものです。

和同開珎は武蔵国秩父郡(現在の埼玉県秩父市)から自然銅(にぎあかがね)が発見され、慶雲5年(708年)正月11日に朝廷に献上された。これを大いに喜んだ元明天皇は、同日に元号を「和銅」に改元しました。その後、我が国初の銭貨として発行されました。直径24mm前後の円形で、中央には一辺が約7mmの正方形の穴が開いています。円形方孔の形式で、表面には、時計回りに和同開珎と表記されています。裏は無紋で、形式は、621年に発行された唐の開元通宝を模したもので、書体も同じで、律令政府が定めた通貨単位である一文として通用した。(青銅の寛永通宝一文銭とほとんど同じ寸法です。)

当時の日本はまだ米や布を基準とした物々交換の段階で、和同開珎は貨幣としては畿内とその周辺を除いてあまり流通しなかったとされています。また、銅鉱山が一つ発見されただけで元号を改めるほどの国家的事件と捉えられていた当時において大量の銅原料を確保する事は困難で、流通量もそれほど多くなかったと思われます。それでも地方では、富と権力を象徴する宝物として使われ、全国各地で発見され、渤海の遺跡など、海外からも和同開珎が発見されています。当初は一文で米2kgが買えたと言われ、また成人1日分の労働力に相当したそうです。

加熱し溶解、鋳型に流し込んで銭貨や仏具が作れる自然銅は製錬を必要としませんが、自然界に大量には存在しません。使い切ってしまうと、今度はその鉱山の紫色や緑色の酸化銅鉱石を使うようになります。加熱溶解し還元を行います。次には高度な製錬技術を必要とする硫化銅鉱石、黄銅鉱を使用しました。又、銅鉱石の中に銀を含むものは複雑な方法で銀を分離しました。先月号で詳細を説明した『灰吹法』で16世紀前半に我が国にもたらされた技術です。これにより製銅と銀の分離技術が確立しました



自然銅(ユタ州産)
純度が高く製錬を
必要としない



藍銅鉱・孔雀石
(酸化銅鉱石)



黄銅鉱
(硫化銅鉱石)

皇朝十二銭 :
和同開珎 708年(和銅元年)から発行された12種類の通貨。
万年通宝・神功開宝・隆平永宝・富寿神宝・承和昌宝
長年大宝・饒益神宝・貞観永宝・寛平大宝・延喜通宝
乾元大宝 958年(天徳2年)

『鉄のふしぎ博物館』
来て!見て!ふれて! ふしぎ体感
鉄を見る目がかかりますよ。
ぜひお越しください。